発刊にあたって

福井県文書館資料叢書の第四巻『越前松平家家譜　慶永』をおとどけいたします。

これまで当館の資料叢書は二年に一冊のペースで刊行しており、第一巻および第二巻では江戸時代中期の越前国幕府領大庄屋、土屋次郎左衛門の日記、第三巻では江戸時代後期の若狭国小浜の米商人、井筒屋勘右衛門の日記を翻刻いたしました。

今回はとくに福井県の「幕末アニバーサリー活動推進事業」の一環として、越前松平家の「家譜」をとりあげ、とりわけ幕末の政治動向に大きな影響を与えた松平慶永に関わる五三冊分を翻刻、刊行することになりました。事業としては全五巻の刊行を予定しております。

さて、「家譜」には初代福井藩主秀康から最後の藩主茂昭にいたるまでの二五三冊に加え、「追加」として慶永に関わる明治元年から二十三年にかけて記された一七冊があり、合計二七〇冊にわたって松平家の記録が綴られています。

内容は松平家を特徴づける冠婚葬祭や、幕府・将軍家との諸儀礼および幕府法令などがかなりの部分を占めていますが、同時に藩内の法令や財政、訴訟、自然災害など、藩政全般にわたる記述も少なからず含まれています。

慶永が藩主であった約二〇年の間（天保九年～安政五年、一八三八～五八）には、前述した内容に加え、外国の脅威に備えるため、洋式の武器製造や兵制の整備が進められました。とりわけ安政期（一八五四～五九）に入ると藩校明道館による人材育成、産物の交易などを中心とする藩政改革が目立ってきます。慶永はそれらを背景に中央政治に関わり、将軍継嗣や通商条約の問題にあたりますが、安政五年七月大老井伊直弼によって隠居・謹慎させられます。

しかし、井伊直弼が桜田門外の変で倒れると慶永は謹慎を解かれ、再び中央政治で活躍することになります。文久二年（一八六二）七月慶永は政事総裁職に就き、以後幕政改革や公武一和、

対外問題等に精力的に取り組みました。倒幕論が高まると、慶永は公議政体論による変革を求めます。これらは慶永が二十代後半から三十代半ばに至るもっとも充実した時期であり、「家譜」の記事はその意味でもたいへん重要といえます。

明治に入り、慶永が新政府の要職から離れた後は、慶永の家族や家政に関わる記述がさらに増えますが、北陸地方への鉄道敷設や学習院・華族会館建設への関わりなど、注目すべき記事も少なくありません。

さて、当館は開館時よりデジタル情報の充実に力を注いできました。既に発刊されている三巻の資料叢書は、当館ホームページ上から翻刻文を閲覧していただけますが、今回発刊される叢書も同様に翻刻文を掲載いたしますので、インターネット上で知りたい記事を簡便に検索することが可能です。「家譜」の原本は非常に整った文字であるものの、読み解くには一定の修練を必要とし、そのことが資料を活用することの大きな壁になっていましたが、今回の発刊によって、原本にあたることなく、いつでも翻刻文が利用できます。また、この種の資料集はおもに研究者の利用に資することに主眼が置かれていましたが、本巻では歴史に興味関心を持つ方々に幅広く利用していただくために、可能な範囲で傍注の量を増やしました。

資料は利用されてこそ価値があるものです。多くの皆様にこの叢書および当館ホームページに掲載されるデジタル情報を利用していただき、福井県の歴史に対する興味関心が高まること、さらには福井県に関わる歴史研究がさらに発展することを願ってやみません。

平成二十二年二月

福井県文書館長　寺　﨑　秀　徳